離れ離れになった私達は。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
離れ離れになった私達は。

【Ｎコード】
Ｎ０８２３Ｍ

【作者名】
はなちょこ

【あらすじ】
あんなに好きだったのに。
もう二度と会えないんでしょうか？

（前書き）

この話は「願い事は一つだけ」の続編です。

「願い事は一つだけ」

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０７４０ｍ／

私の病気が治ったことは奇跡としか言いようがない。
そう言ってお医者さんが驚いていた。
お父さんとお母さんは私が元気になったことにすごく喜んでくれた。
だけど。
なんで圭ちゃんが隣にいないの？

「・・・・・・あれ？」
目を覚ますと見たことのない部屋にいた。
白い枠の窓から太陽の光が差し込んでいた。
六畳ほどの部屋には、私が今横になっているベッドしかなくて
何だか殺風景な部屋だった。
「そうだった。ここ日本じゃないんだっけ」
私はそう言って起き上がった。
お父さんの仕事の転勤に着いてきて、今ここはアメリカなんだった。
昨日、アメリカに着いたばかり。

ふと右手の薬指を見た。
小さな青い石がついたシルバーのリング。
圭ちゃんとおそろいのリング。
私はその指輪をそっと左手で触った。
なんでなんだろう。
なんで私は圭ちゃんにあんな手紙を書いたんだろう。
もう二度と会えなくなるような、そんな内容の手紙を。
なんでそんなこと・・・・・・。

ベッドの下に置いてあるカバンが目についた。
私のカバン。
そこから携帯を取り出した。
電源を入れてから気付いた。
「そっか・・・・・。携帯もここじゃ使えない」
そう呟いて携帯をベッドに放り投げた。
部屋を出て慣れない階段を降りた。

キッチンにお母さんがいた。
お母さんは私に気付くとこう言った。
「よく寝てたわね。もうお昼過ぎてるわよ。時差ボケね」
「もうお昼過ぎなの」
「そうよ。サンドイッチあるけど食べる？」
「うん」
私はそう言ってキッチンの真ん中にあるテーブルに座った。
お母さんがサンドイッチをのせたお皿を私の前に置いた。
「中身はトマトとチーズとハムよ。舞、好きでしょ」
お母さんがそう言ってニッコリ笑った。
私の病気が治ってから、お母さんはやっと笑顔を取り戻した。
私はサンドイッチにかぶりついた。
圭ちゃんとどうやって連絡をとろう。
ずっとそればかり考えていた。
キッチンの横のリビングに目をやった。
広いリビングにはテレビにテーブルにソファーがあるだけ。
テーブルの真ん中にパソコンがあった。
「あのパソコンってお父さんの？」
私がそう言うとお母さんはリビングに目をやって言った。
「そうよ。朝、使ってたわ。会社には持っていかないのね」
お母さんの言葉に私はリビングに行ってパソコンの前に座った。

「お母さん、買い物に行ってくるわね」
「え？　大丈夫なの？　来たばかりでどこにスーパーがあるか分かるの？」
「家の前の通りを歩いて5分のところにスーパーがあったわ」
「へえ。そうなんだ。いってらっしゃい」
「なるべく早く帰るわ」
お母さんはそう言うと玄関から出て行った。

私はお母さんが外を歩いて行くのを見届けてからパソコンを起動させた。
もともとお父さんと私が使っていたパソコンだ。
慣れた手つきでキーボードを打つ。
カタカタという音だけが静かな部屋に響いた。
『パソコンでメールするのは久しぶりだね。今アメリカだよ。』
そこまで打って少しだけ悩んだ。
そして。
こう打った。
『圭ちゃんに会いたいよ。』
その内容で圭ちゃんのパソコン宛てにメールを送った。
メールが送信されると。
私はパソコンを閉じた。
「はあ・・・・・・」
そうため息をつくと床に座ったままソファにもたれた。
圭ちゃんから私宛にメールは来てなかった。
あんな手紙を送ったんだから。
もしかしたら嫌われたのかな・・・・・・。
ううん。
そんなわけない。
圭ちゃんはそんな人じゃない。
「そうよ！」

私はそう言うと勢いよく立ち上がった。
キッチンに行くと冷蔵庫から牛乳を取り出した。
近くにあったガラスのコップに注いで
それを一気に飲み干した。

本当は死ぬはずだったことも分かってた。
だから。
病気が治って本当に嬉しい。
でも。
圭ちゃんがいないこの場所で。
圭ちゃんのいない生活をするなんて。
そんなのできない。

「日本に残りたいなら残っていいんだぞ。叔母さんが舞が家に来てもいいと言ってるんだ。叔母さんの家ならここからも近い」
私もアメリカに行くと言った時、お父さんがそう言った。
叔母さんの家は叔母さんと叔父さんの二人暮し。
一人息子の康之君は2年前から東京で働き始めた。
だから。
叔母さんの家に居候させてもらって日本に残ることもできた。
叔母さんの家からなら圭ちゃんにもすぐに会えたし
一緒に高校に通うこともできた。
なのになんで私はそれでも「行く」と言ったんだろう。
・・・・・分からない。

「会いたいよ」
私はそう呟いてソファに寝転んだ。
目を閉じると浮かんでくるのは。
圭ちゃんの笑顔。
私の大好きな圭ちゃんの笑顔。

胸がしめつけられるような感覚。
会いたい。
会いたい。
会いたい。

今夜、お父さんが仕事から帰ってきたら
お父さんに「やっぱり私は日本に戻りたい」
そう言ってみよう。
お父さんもお母さんも分かってくれる。

ピルルルル。
聞きなれない電話の音で目が覚めた。
ああ、寝ちゃったんだ。
ちょうど家に帰ってきたお母さんが電話に出た。
「はい。そうです。・・・・・・え?!」
お母さんが驚いた声を上げた。
私は体を起こしてお母さんの横顔を見た。
「そうですか・・・・・・はい。分かりました。はい。今から向かいます」
お母さんはそう言うと電話を切った。
何かをメモしていたようだった。
「どうしたの?」
私がそう聞くとお母さんは青ざめた顔でこう言った。
「お父さんが会社で倒れたって・・・・・・」

タクシーをひろってお父さんが運ばれた病院へ急いだ。
病院へ着くと病室でお父さんは眠っていた。
お父さんに付き添ってくれていた会社の後輩の森川さんが、お医者さんの通訳をしてくれた。
「高橋さん。過労だそうです。今日はここに泊まって、明日は家で

ゆっくりしてください、だそうです」
その言葉に私とお母さんはホッと肩をなでおろした。

帰りは森川さんが車で家まで送ってくれた。
お母さんはずっと黙ったままだったけど。
ポツリとこう言った。
「もう誰かがいなくなるかもしれない、なんて考えたくない・・・・」
私はお母さんの顔を見た。
お母さんの目には涙がたまっていた。

圭ちゃんに会いたい。
すごく会いたい。
だけど。
お母さんを一人にさせたくない。
お父さんも私がここにいることを望むだろう。

「圭ちゃん・・・・・・」
私はそう呟いて左手でペアリングを触れた。
圭ちゃんの笑顔が浮かぶ。

家の前に車が止まると私とお母さんは車を降りた。
「ありがとうございました」
お父さんの後輩の森川さんにそう言って頭を下げるお母さん。
「ありがとうございました」
お母さんに続いて私もペコリと頭を下げる。
森川さんが「そんないいですよ」と言って笑った。
そして顔を上げた私の顔をチラリと見てこう言った。
「あ、あの何か困ったことがあったら何でも言ってください」
森川さんはそれだけ言うと車で帰って行った。

「森川さん舞のこと気に入ってたみたいね」
玄関でお母さんが私にそう言った。
「え？！」
私は驚いてお母さんの顔を見た。
「まだ三〇代前半くらいじゃないかしら、森川さん」
「なに言ってるのよ。私は一七歳よ。それに・・・・・」
「圭太君にも似てたわね。圭太君が三〇歳になったらあんな感じかしらね」
お母さんはそう言ってキッチンに向かった。
私はソファに座った。
確かに森川さんの顔を見た時。
圭ちゃんに似てるなあって思った。
だけど。
森川さんは圭ちゃんじゃない。

パソコンを起動させてメールボックスを確認する。
圭ちゃんからの返事はない。
私はリビングで大きなため息をついた。
ふとリビングの隅にある小さな丸いテーブルに目をやる。
その上には電話が置いてある。
そっか。
圭ちゃんの家に国際電話をかけようか。
でも日本はいま何時なんだろう？
「お母さん。日本って今何時なの？」
キッチンで買い物してきた物を冷蔵庫にしまっていたお母さんが少しだけ考えてからこう言った。
「朝五時じゃないかしら」
「そうなんだ」
私はそう言うとソファに座った。
ソファに体をしずめる。

朝五時に電話したら迷惑よね。
そしたらいつ圭ちゃんの家に電話したらいいんだろう・・・・・・。
私はパソコンで日本とここニューヨークの時差を調べてみた。
こっちが朝七時の時に日本に電話をかければ午後八時かあ。
夜の八時なら圭ちゃんは家にいる時間だ。
明日は少し早起きして圭ちゃんの家に電話をかけてみよう。

次の日。
時計を見ると朝の六時だった。
部屋から出て着替えると一階へ下りて顔を洗う。
タオルで顔を拭きながら思う。
圭ちゃんの声が聞けるのかな・・・・・・。

ドキドキしながら圭ちゃんの家に国際電話をかける。
まるで片思いの相手に初めて電話するかのような。
そんな気分だった。

私は静かに受話器を置いた。
そのままキッチンに行って冷蔵庫から牛乳を取り出した。
コップに入れずにパックから直接、牛乳を飲む。
圭ちゃんの家は誰も電話に出なかった。
声が聞けると思ったのに・・・・・・。
「はあ・・・・・・」
私は大きなため息をついた。
口を手の甲で拭ってからキッチンを出た。
リビングの窓辺に立って外を見る。
日本とは違う景色。
家の前の道はとても大きくて歩道の幅も広い。
車道と歩道と間を沿うようにして大きな木が綺麗に並んでいる。

反対側の車道と歩道の間も同じように大きな木がずらりと並んでいた。
辺りは家ばかりだ。
この辺りは日本人が多いらしい。
転勤でこっちに住むことになった日本人の家族が多いそうだ。
日本とは遠く遠く離れた場所。
圭ちゃんに会いたい。
せめて声が聞きたい。

それからも私は圭ちゃんからのメールを待ち続けた。
その間、私は近くの日本人学校に通うことになったり
お向かいの家の同じくお父さんの転勤でここに来たという
私と同じ日本人学校に通う名古屋出身の一六歳の女の子と仲良くなったり
近所のスーパーくらいには行けるようになったり
そんな風に私の日常が変わり始めていても。
圭ちゃんからメールが来ることはなかった。

週末になると私はまた国際電話をかけようとリビングへ入った。
朝八時。今日は少し寝坊をした。
既に電話の前にはお母さんがいた。
「あら？　変ねぇ・・・・・・」
お母さんが受話器を見てそう言った。
「どうしたの？」
私がそう言うとお母さんは私を見て言った。
「電話の調子が悪いのよ。買ったばかりなのに変ねぇ」
私はお母さんの言葉を聞いて静かにリビングを出た。
階段を上ろうとしてふと立ち止まる。
「・・・・・・やっぱり・・・・・・・あの夢・・・・・・・」
そう呟いてからハッとした。

「そんなわけない！　夢だったんだもん！」
私はそう言って首を横に振った。

「へぇー。何だかロミオとジュリエットみたーい！」
学校の帰り道をお向かいの梨絵ちゃんと歩いていた。
私が圭ちゃんからのメールを待っていることを話すと
梨絵ちゃんはそう言ってキラキラした目で私を見た。
「ロミオとジュリエットとは違うよ」
「でも障害がある恋だよね」
「そうだけど・・・・・何だか待つのも疲れちゃった」
私がそう言って笑うと梨絵ちゃんは複雑な表情をしていた。

圭ちゃんから来ないメール。
毎日毎日パソコンのメールボックスを確認して。
ガッカリする。
それがもう二週間も続いてる。
そんなのもう疲れちゃったよ。

「おかえりなさい」
その声に顔を上げると玄関のドアの前に森川さんが立っていた。
森川さんは私を見るとニッコリ笑った。
「森川さん、仕事じゃないんですか？」
「少し時間あったから抜けてきたんだよ。あんまり時間はないけど・・・・・」
森川さんはそう言うと私に袋を差し出した。
「なんですか？」
「最近、僕の家の近くにできたパン屋さん。美味しいんだ」
「いいんですか？」
「どうぞ。多めに買っちゃったから、おすそわけ」
森川さんはそう言うとニッコリ笑った。

私は森川さんから袋を受け取った。
「ありがとうございます」
「いやいや。じゃあ、またね」
森川さんはそう言うと足早に車に戻って
窓から顔を出して私に手を振ると、車を走らせて会社へ戻って行った。

森川さんは先週も家の玄関のドアの前にいて
調味料をどっさりとくれた。
ここから車で一時間くらいかかる大きなスーパーは日本の調味料の品揃えがいいから、と言って。

私はドキドキした胸に気付かないふりをして
なにごともなかったかのように家に入った。
お母さんはちょうどこの時間は買い物に行っている。
自分の部屋に戻る前にリビングのパソコンを起動させる。
「・・・・・・はあ」
私は深いため息をついた。
圭ちゃんからのメールは今日も来ていない。

「森川さん」
次の週の水曜日。
やっぱり同じ時間に玄関のドアの前に立っていた森川さんに。
今日は私から先に声をかけた。
森川さんが驚いた顔をして私を見た。
そして。
「あ、おかえり」
森川さんはそう言ってニッコリ笑った。
「あの。上がっていってください」

「え？！」
「いつも外ですよね。入ってください。紅茶でも入れますから」
「いえ。そういうつもりじゃあ・・・・・・もしかして迷惑・・・・・・かな？」
「そんなことないです。まだこの町に馴染めないから、調味料とかパンとかすごく助かるって父も母も言ってます」
「ああ。それは良かった」
「だけどいつも外なんでたまには上がってください」
私がそう言うと森川さんは穏やかな笑顔を見せてこう言った。
「じゃあお言葉に甘えて」

「森川さん三〇歳なんですか」
「舞ちゃんからしたら、おじさんだよね」
森川さんはそう言って苦笑いしながら私の入れた紅茶を飲んだ。
「ん。美味しい」
森川さんはそう言って私にニッコリ笑った。
私はそんな森川さんをじっと見つめた。
「うわ！　もうこんな時間か。そろそろ会社に戻らないと」
森川さんは腕時計を見てそう言うと立ち上がった。
「ケーキ、ありがとうございます」
「いえいえ。美味しいと評判の店だったからつい多めに買っちゃって」
森川さんはいつも多めに買ってしまうのだろうか。
ううん。
それも私が気を使わないように言ってくれてるんだろう。
・・・・・・優しいな。

「あ！　お母さん！」
玄関のドアを開けるとお母さんが立っていた。
「あら！　森川さん来てたのね！」

お母さんは慌てた様子でそう言った。
「すみません、お邪魔してました」
森川さんがお母さんにペコリとお辞儀をした。
「いいのよう！　もっとゆっくりしていけばいいのに」
お母さんの言葉に森川さんは笑いながら車に戻った。
車の窓の向こうから私とお母さんにペコリとお辞儀をして
森川さんは会社へと戻って行った。
「お母さん！　立ち聞きしてたでしょ！」
キッチンへ行くお母さんに私はそう言った。
「立ち聞きなんかしてないわよー。窓の外から見えただけよ」
「やっぱり！」
私はそう言うと階段を上がって自分の部屋へ戻った。

自分の部屋に入るとベッドに寝転がった。
ドキドキする胸をおさえた。
頭に浮かぶのは圭ちゃんの顔。
でもすぐに森川さんの顔に変わってしまう。
「私が好きなのは圭ちゃんなのに！」
私はそう言ってクッションに顔をうずめた。
圭ちゃんの顔が。
大好きだった笑顔が。
ちゃんと思い出せない。
まだこっちに来てから一ヶ月も経ってないのに・・・・・・。

「一年ぶりだなあ」
私はそう言って辺りの景色を眺めた。
目の前に広がる住宅街。
この景色を見て懐かしいなんて思う日が来るなんて思わなかった。
「せっかくの夏休みなんだから日本で過ごしたいだろ」
お父さんがそう言ってスーツケースを持って家に入る。

「久々の我が家ね」
お母さんがそう言ってお父さんに続いて家に入って行った。
夏休みになった。
そう。
あれから。
日本を離れてから一年が経った。
お父さんの仕事も夏休みで、その間だけ日本に帰国することにした。
私は足を止めてお隣の家を見た。
圭ちゃんいるのかなあ。
しばらくお隣を見ていると。
圭ちゃんが自転車で家に戻ってくるのが見えた。
一年ぶりに見る圭ちゃんの顔。
私は驚いて、でも嬉しくて
「圭ちゃ・・・・・」と叫ぼうした。
その時だった。

圭ちゃんは自転車を家の前で止めた。
圭ちゃんの後ろに乗っていた女の子が自転車から下りた。
私の胸がドクンと鳴る。
「いいのか？　家まで送るよ？」
圭ちゃんがその女の子に聞く。
その女の子は私の通っていた高校の制服を着ているようだ。
顔はここからだとよく見えない。
「ううん。いいよ。図書館にも寄りたいから。ありがとう」
女の子が圭ちゃんにそう言った。
「いや。俺こそ勉強教えてくれてありがと」
圭ちゃんも女の子にニッコリ笑った。
大好きな笑顔が。

他の女の子に向けられている。
「同じ大学、絶対に合格しようね！」
女の子の言葉に。
私の胸が痛んだ。
「ああ。絶対な」
圭ちゃんはそう言って女の子にニッコリ笑った。
「じゃあ明日ね」
「おう。明日な」
女の子が歩き出した。
こっちに来る。
私は慌てて塀の後ろに隠れた。
「え？！」
女の子の顔が一瞬だけ見えた。
私は驚いてその女の子の背中を見つめた。
その女の子は私に似ていた。

私が日本にいる間、圭ちゃんとは会わなかった。
バッタリ会うこともなかった。
一度だけ窓の外を覗いた時。
圭ちゃんが土曜の朝から出かけて行くのが見えた。
めいっぱいオシャレをして。
ああ、あの子とデートなんだな、と思った。
ショックだったけど。
なんとなく予想していたことだった。

実は日本に帰国する一ヶ月前。
思い出したように圭ちゃんからのメールを確認してみた。
そしたら。
圭ちゃんからやっとメールが届いていた。
ううん。

私が圭ちゃんからのメールを確認しなくなっていたのだ。
確認しなくなったのは半年くらい前から。
そして。
圭ちゃんからメールが来たのは三ヶ月前だった。
内容はこうだった。

元気か？そっちの生活には慣れたか？
舞がちょうど日本を経ってすぐに俺のパソコンが壊れてさ。
もしかしたら舞からメールが来てるかもしれない。
って思ったけどなかなか新しいパソコンを買えなくて。
もしかして国際電話とか手紙でもくるのかと思ってた。
だけど全然連絡こなくて、俺もいつのまにか受験生だよ。
これから俺は忙しくなる。舞もそっちの生活は大変だろう。
離れ離れになって俺達は別々の道を歩き始めてしまったんだな。

返事は返せなかった。
正直、圭ちゃんのことを思い出すことが少なくなったから。
いまさらなんて返事をしていいのかも分からなかった。
ううん。
お互いとっくに答えは出ていたんだ。

「森川さん」
いつものように玄関のドア前で待っている森川さん。
一週間に一度、必ずやって来る。
「多めに買っちゃって」そう言って色々な物を持ってきてくれる。
梨絵に話したら「それは私に会う口実なんじゃない」って言われた。
「今日は美味しいミルクティー入れます」

私がそう言ってニッコリ笑うと森川さんもニッコリ笑った。
森川さんが私の入れたミルクティーを全部、飲み干した時。
私の顔を見てこう言った。
「今度の土曜日、ドライブでも行かない？」
そう言った森川さんは耳まで赤くなっていた。
私はニッコリ笑ってこう言った。
「お弁当作りますね」

圭ちゃんのことは大好きだった。
小さな頃から一緒だったし。
中学二年のバレンタインに告白してＯＫもらえた時は
本当に本当に嬉しかった。
その場でぴょんぴょん飛び跳ねたくらい。
圭ちゃんと一緒だった日は幸せで。
ずっとこんな日が続くんだと思ってた。
私が病気になった後も。
入院した私を毎日お見舞いに来てくれて
花を持ってきてくれて。
なんでだろう。
私ね病気を治してくれたのは圭ちゃんじゃないか、って思うの。
なんでだろう。
なぜかそう思うの。
だけど。
私と圭ちゃんの心が離れていってしまった。
私が先なのか。
それとも圭ちゃんが先なのか。
それは分からないけど。
もしかしたら。
これは運命だったのかもしれない。

あの日の夜。
私の病気が治る前日の夜。
夢に妖精が出てきてこう言った。
「あなたの病気は治る。だけど圭太には二度と会えなくなるかもしれない。それでもいい？」
私は迷ったけど、静かに頷いた。
次の日、病気が治っていた。
圭ちゃんがお見舞いに来なかった。
その時。
私はもう覚悟していたのかもしれない。
圭ちゃんと二度と会えなくなることを・・・・・・。

私は右手の薬指にはめたままだったペアリングをはずした。
その指輪を窓際の小物入れの中にそっと入れた。
私は指輪に向かってこう呟いた。
「ありがとう。大好きだったよ」

離れ離れになった私達は。
別々の道を歩き始めた。
お互い違う人を見つめながら。

（おわり）

（後書き）

読んでくれた方ありがとうございました。
これも数年前に書いた話です。
「願い事は一つだけ」の続編ですが、随分と雰囲気が変わってしまいました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0823m/

離れ離れになった私達は。

2010年10月8日14時38分発行